

画

正岡子規

青空文庫

○十年ほど前に僕は日本画崇拜者で西洋画排斥者であった。その頃為山君いざんと邦画洋画優劣論をやったが僕はなかなか負けたつもりではなかった。最後に為山君が日本画の丸い波は海の波でないという事を説明し、次に日本画の横顔と西洋画の横顔とを並べ画いてその差違を説明せられた。さすがに強情な僕も全く素人であるだけにこの実地論を聞いて半ば驚き半ば感心した。殊に日本画の横顔には正面から見たような目が画いてあるのだといわれて非常に驚いた。けれども形けいじ似は絵の巧拙かかわに拘からぬという論でもってその驚きを打ち消してしもうた。その後不折君と共に『小日本』に居るようになって毎日位顔を合すので、顔を合すと例の画論を始めて居た。この時も僕は日本画崇拜であつたからいう事が皆衝突する。僕が富士山は善い山だろうという、不折君は俗な山だという。松の木は善い木であろうという、それは俗な木だという。達磨だるまは雅であろうという、達磨は俗だという。日本の甲冑かっちゆうは美術的であろうという、西洋の甲冑の方が美術的だという、一々衝突するから、同じ人間の感情がそれほど違うものかと、余り不思議に思つてつくづくと考えた。その内ふと俳句と比較して見てから大に悟る所があつた。俳句に富士山を入れると俗な句になりやすい、俳句に松の句もあるけれど松の句には俗なのが多くて、かえつて冬木

立の句に雅なのが多い、達磨なんかは俳句に入れると非常に厭味いやみが出来る、これ位の事は前から知って居たのであるけれどそれを画の上に推し及おぼす事が出来なんなのである。俳句を知らぬ人が富士の句を見ると非常に嬉しがるのと、我々が富士の画を見ると何かなしに喜ぶのと、同じ事であるという事が分つて、始めて眼が明いたような心持であつた。けれどもまだ日本画崇拜は変わらないので、日本画をけなして西洋画をほめられると何だか癩しゃくに障さわつてならぬ。そこで日本と西洋との比較を止めて、日本画中の比較評論、西洋画中の比較評論というように別々に話してもろうた。そうすると一日一日と何やら分つて行くよ
うな気がして、十ヶ月ほどの後には少ししたかになつたかと思つた。その時虚心平氣に考
えて見ると、始めて日本画の短所と西洋画の長所とを知る事が出来た。とうとう為山君や
不折君に降参した。その後は西洋画を排斥する人に逢うと癩かんしゃく癩しゃくに障るので大に議論を
始める。終には昔為山君から教えられた通り、日本画の横顔と西洋画の横顔を画いて
「これ見給え、日本画の横顔にはこんな目が画いてある、實際 君、こんな目があるもの
じゃない」などと大得意にしゃべつて居る。その氣障加減きざには自分ながら驚く。

○僕は子供の時から手先が不器用であつたから、画は好きでありながらそれを画く事は出

来なかった。普通に子供の画く大将絵も画けなかった。この頃になって彩色の妙味を悟ったので、彩色絵を画いて見たい、と戯たわむれにいったら、不折君が早速絵具を持って来てくれたのは去年の夏であつたろう。けれどもそれも柵にあげたままで忘れて居た。秋になって病気もやや薄うすらぐ、今日は心持が善いという日、ふと机の上に活けてある秋海棠しゅうかいどうを見て居ると、何となく絵心が浮んで来たので、急に絵の具を出させて判紙展のべて、いきなり秋海棠を写生した。葉の色などには最も窮したが、始めて絵の具を使ったのが嬉しいので、その絵を黙語先生や不折君に見せると非常にほめられた。この大きな葉の色が面白い、なんていうので、窮した処までほめられるような訳で僕は嬉しくてたまらん。そこでつくづくと考えて見るに、僕のような全く画を知らん者が始めて秋海棠を画いてそれが秋海棠と見えるは写生のお蔭かげである。虎を画いて成らず狗いぬに類すなどというのは写生をしないからである。写生でさえやれば何でも画けぬ事はないはずだ、というので忽ち大天狗になって、今度は、自分の左の手に柿を握って居る処を写生した。柿は親指と人さし指との間から見えて居る処で、これを引きあげるのは非常の苦辛くしんであつた。そこへ虚子きよしが来たからこの画を得意で見せると、虚子は頻しきりに見て居たが分らぬ様子である。「それは手に柿を握って居るのだ」と説明して聞かすと、虚子は始めて合点がてんした顔附で「それで分つたが、さつき

から馬の肛門のようだと思つて見て居たのだ」というた。

○僕の国に坊主町という淋しい町があつてそこに浅井先生という漢学の先生があつた。その先生の処へ本読みに行く一人の子供の十余りなるがあつたが、いつでもその家を出がけにそこの中庭へ庭一ぱいの大きな裸男を画いて置くのが常であつた。それとも知らずその内の人が外へ出ようとすると中庭に大男が大物を抱いて居る画があるので度々驚かされる。今日もまた例の画がかいてあつたとその内の人が笑いながら話すのを僕が聞いたのも度々であつた。その時の幼い滑稽絵師が今の為山君である。

○僕に絵が画けるなら俳句なんかやめてしまふ。

青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二卷」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第三巻第五号」

1900（明治33）年3月10日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※底本では、表題の下に「子規」と記載されています。

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年5月19日作成

2011年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

画

正岡子規

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>